

本書の意義

二……満洲をはじめとする戦前戦後の外地における新聞の動向を知ることができる。

旧植民地時代の新聞史研究は、国内の新聞研究に比べかなり遅れている。本書付録の『満洲新聞協会報』は必要不可欠な基礎資料となる。また、『日本新聞報』にも、満洲・朝鮮・台湾等の外地の新聞界はじめ出版・文化界の動向を伝える記事が多数見られる。これまで国内の新聞の動向に終始してきた日本新聞史研究の幅を広げる可能性を秘める。



『戦時戦後の新聞メディア界—『日本新聞報』 附・『満洲新聞協会報』 内容一覽 (抄1)

満洲ジャーナリズムの推進力として期待 森田久(日本新聞会理事)
記事審査に当りて一若き整理記者に望む 井上圓三(満洲日报社)
上海出版界の動向 大内隆雄
『満洲紙への期待』弘報宣伝の媒体としての重大責務―記事の取扱ひ方に改変の要望
各職場巡り(1) 康徳新聞整理部
中型紙への批判―時機と体裁に考慮の要がある―遺憾乍ら満足とは言へない
安倍三郎(建国大学教授)
中央地方緊密一体化・弘報体制全く確立―初の全滿各省弘報担当三時間会(満洲日報戦時版所感) 全部中型にせよ 城島英一(月刊満洲)
満洲建国十周年東亜探風者大会
(地方に於ける「記者会」整備) 整備運営の基礎
統合より質改善―台湾新聞会誕生。協調態勢形成
南方新聞の現勢(5)―インドネシアの太陽・セレベス新聞
新聞写真の変遷(1)―修正の元祖・中村氏 谷口徳次郎 朝日新聞客員・元同社写真部長
泰国・宣伝陣の両首脳―天羽総裁の招きに応じ見学の旅南方勤務は2年が限度―各社派遣陣容とその待遇
手さぐり道中―点字新聞の語り(3) 高島直定(点字読売編集長)
大陸新報派遣留日学生帰郷
締切・降版・刷出し―全国48社の時間調べ
新聞人の放送―セレベス蒙盟対談 猪伏清(同盟マカッサル支局長)／前野善右衛門(張河口資料協会長)
東亜に超高速輪転機―太原支社は新社屋に移転
(新聞雑誌小説と絶縁―吉川英治氏) 片手間の小説は書きぬ―全力を戦史に傾斜
(朝鮮にも記者登録制)
(ルビ廃止問題をどう見る)
(個人消息) 松野志気雄君(ジャワ新聞出版部長)
(新聞の違反事故減少) 注意の真意 大石(情報局検閲官)
(懇切な殺し方とは) 動物園の猛獣処分と各紙の扱ひ
非常事態の特報掲示―販売配給所の心得いろいろ 伊藤兼三(日本新聞配給会中央本部病務部長)
問題の写真とその撮影者(10)―山本元帥最後の雄姿 岡本博(毎日新聞社)
非常時の新聞対策―鳥取震災の教訓色々 中村清治(新聞会工務部長)
(新聞の決戦態勢に望む各方面の意見) 科学せる婦人記者出でよ 竹内茂代天(読者の声) 伊丹万作
(読者の声) 伊丹万作
(新聞新聞脚) (5) 発行部数は桃と取り組む―異色・和歌山新聞
(新聞に働く女性の声) 強味は家庭記事 山主敏子(同盟通信社特信部)
(新聞の両面新聞会、資料確保と配給調整開始)
朝鮮、台湾の両新聞会、資料確保と配給調整開始
戦時新聞経営の指向(1) 用紙割当再調整の要―善し普及率の変化(出席者) 一方次郎(河北新報社社長)／福葉輪一(読売新聞社業務部長)／新田宇一郎(朝日新聞社業務部長)／川島信太郎(同盟通信社業務部長)／高橋恒次郎(北海道新聞社業務部長)／田中寛次(神戸新聞社業務部長)／長沢千代造(中部日本新聞社業務部長)／栗山長次郎(毎日新聞社業務部長)／日本新聞配給会常務理事)／荒巻昌吉(西日本新聞社業務部長)／佐藤新衛(日本産業経済新聞社業務局長)／嵯峨保二(北同新聞社社長)／宮岸與三松(合同新聞社業務局長)／浦忠倫(日本新聞会理事)／塚村敏夫(日本新聞会総務部長)
(廃止活字と常備活字―各社からの回答集計) 4倍の上位2種類限定のため廃止となる明朝活字の本数及貫数
比島言論界の人々
(大東亜新聞大会) 開会の辞 田中郡吉(日本新聞会会長)
筆と剣と共に在れ 松村秀逸(大本営陸軍報道部長陸軍大佐)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) 中華民國 許力求(中華日報社長)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) タイ国 サット・セイマニーン(タイ・マイ紙主筆)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) 満洲国 李雅森(康徳新聞社編集局長)
(次長)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) フィリピン国 フランシスコ・ビー・イカン(サンデー・トリビューン紙主筆)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) 香港 蘆夢殊(華僑日報總編集長)
(各国代表の演説―共同の思想戦展開) マライ イシヤック・ビン・ハヂ・ムammad(ベリタ・マライ主筆)
(配給使命達成へ―全国共報報国会会議閉) 宣言
(大東亜の新聞人(3) マナイ・ソビアン(アワルト・セレベス紙)
(大東亜の新聞人(4) エー・エー・ハミダシ(ボルネオ新聞マライ語主任)
(北海道新聞と北方研究室) 民族発展の為に微力を 河野広造(室長・農学博士)
(大東亜の新聞人(5) 張翔氏(康徳新聞論説委員)
各社人事―昭南新聞会幹部の異動
(新聞の発達変遷(2) 支那の邸報 原田棟一郎)
(新聞の発達変遷(2) 雷撃記事の制約) 蒲島沖海戦 仁木 敏明(海軍報道班員読売新聞特派員)
(大東亜新聞大会) 松崎歌賀志(平壤府朝鮮第50部隊補本隊)
(戦時体制下の中国新聞事業(上) 大東亜新聞大会・中国代表団報) 国府
(参戦後の概況―華北方面)
(東京地区配給新体制) 東京地区機構整備要綱 整備実施要綱―販売所長資格条件
(亜細亞の新聞統制令―政府公報は掲載の義務を負ふ)
(中南米の新聞) 井沢実(情報局第3部対外事業課、情報官)
(個人消息) 座間勝平氏(東亜新報東京支社員)
(少年兵語学学校へ作家派遣―少国民に贈る満洲新聞の読物マライの新聞人二君 義勇軍へ)
(台湾六紙統制令) 非常呼集実施規定
(沖繩新聞の非常呼集規定) 非常呼集実施規定
前線の報道員を讀ふ 田中冬二
(戦死将士の写真各社申合せ) 編集委員会
(日満女性の座談会) 佐賀合同新聞の催し
(新聞に望む) タブロード礼贊―閣を懸せ 平生 凱三郎
(徐州大陸新報発刊への布陣成る)
(与論動員の対象と新聞) 難波田 春夫(東大助教)
(検閲問答・対談(1)―時間が無いのと微妙な点に悩む―一人知れぬ検閲官の心遣ひ) (対談) 金井(情報局検閲課長)／三浦(読売新聞編集局長)
(海陸報道写真班の草分け(下) 谷口徳次郎)
(北国毎日で検閲当局と懇談)
(京城日報、出版部を強化)
(戦時蒙盟新聞) 安吉英夫(東京支社通信部長)
(与論動員の対象と新聞(上) 寺田弥吉(総力戦学会)
(勤労読者を対象に五社、小型新聞発行―3月から面的な「戦時版」その形式は)

本書の意義

三……個別新聞社の動向を知ることができる。

戦時期においては新聞統合が強力に推進され、姿を消した新聞社は少なくない。戦後には、多くの新興紙が登場したが、既存新聞社との競争に敗れ淘汰。社史が編まれることもない、これら各紙の消長が本書には掲載されている。重要な人事情報をはじめ得られるものは多大。



『戦時戦後の新聞メディア界—『日本新聞報』 附・『滿洲新聞協會報』 内容一覧 (抄2)

戦時版はかく在りたい。平易な生活指導。投書欄や落語。漫才も結構。国塩耕一郎(厚生省勤労局第2課長)

十三紙の強化・朝鮮の新聞会 阿部達一(朝鮮総督府情報課長)

書齋を出て(2) 一読者欄の拡張を建設的意見を持ち上げたい(対談) 阿部真之介/清沢列

戦時皇国新聞道の在り方 高須芳太郎(日大教授)

道新の冬季練成 織田作之助

戦時版の責任者から訊く 龜山巖(中部日本戦時版整理部長)

読売宮崎主幹ビルマ支社社長に淡々たる気持ち 宮崎氏転出の弁 昭南新聞全紙刷新へ

南方戦線一年余 中野実(陸軍報道班員・読売通信部長)

機影(2) 多田裕計

地方紙の在り方 泉民の声調査一戦没者記事

春の新聞人(2) 山根真治郎氏(東京新聞編集局長) 清水昆

地方の推進課題 府県編集部の報告 沖繩(1)

夕刊休止縮切線後上の紙面 編集者の苦心と熱情 総合編集の徹底化へ 為章(毎日参与兼整理部長)

戦時版は(このまゝ)よいか 読者の立場から 田中(ヤマサ醤油会社庶務課長)

新聞に対する与論調査 新潟県(1) 知識階級層の認識 日本新聞会 編集部

北支の新聞を語る 民衆は非常に関心 北支の特殊性は 非常対策進む 共同号外発行 発行部数と大きさ 頒布方法 華北の五大漢字紙 統合の具体案成る

台湾新報社 4月1日から発行 会長以下首脳部決る

戦時版の反響を聴く 中京 読者の立場から 現場に役立つもの 榊原清太郎(明治時計製造株式会社社長)

戦時・生活の指導と新聞 素材消化に力を 新聞への要望 岩松五良(翼賛会戦時生活部長)

前線より帰って(1) 報道内容の再考を 一次は南方の開発 大平安孝(同盟通信社)

デマの根拠地 上海の新聞界 森山喬(大陸新報社常務理事)

紙弾 疎開と地方紙 小田山泰輔

地方新聞の在り方 新聞行脚子を囲む座談会(上) 国土計画的な再編集(視察記者と担当地区) 前田渡(近畿以西) 中根克己(東海中部) 菅原庸真(北陸) 佐藤信夫(関東) 小田英雄(東北北海道) 佐藤嘉四郎(近畿中部) 一部 泉紙に望む 地方文化と地方紙 中村武羅夫(文報事務局長)

地方文化を育てよ 泉紙に望む 地方文化と地方紙 中村武羅夫(文報事務局長)

戦時版へ 我らの注文 産報が聴いた工具の希望

従軍記者検閲に抗議

使命達成を誓ひ合ふ 新聞会主催の日華新聞人の交歓 郭秀峰氏の挨拶

投書をどうするか 勿体なや肩籠人 政府施策改善の貴重な資料 瀧正雄(翼賛会民情部座長)

足で拾った「民の声」 翼賛会派遣記者の手記 6 写真を書き 熊谷次郎(河北新報)

日本新聞史(36) 「昭和編」 朝鮮に於ける整理統合 小野秀雄(ラバルルより選りて「新聞を想ふ」論説について 白取貞次郎(朝日新聞特派員)

新任務に待機する伝所鳩 羽の偉力 非常事態下に備へ へインドネシア新聞と共栄圏 アブドゥル・マジッド・ウスマン(スマトラ)

ある種の文章について 北九州空襲に際しての感想 小田嶽夫

疎開児童を対象に 『東京子ども新聞』 東京新聞社が発行 疎開地全部(新聞鳩も決戦) 非常時に各地と連絡 近く総軍国防鳩通信隊結成(言論鳩達の論言) 諸君の見識に期待 緒方総裁 招待席上で挨拶

地方紙の調査機関紹介 大阪新聞 調査、研究を 一体 完全なる資料整備 中央検閲当局 地方紙と連絡 検閲 機関に懇談

内台の報道陣は完璧 台湾新報の目覚ましい活躍

東インド独立を控へて 誓ふ同志共死 ジャワ新聞会の編集長会議

記者登録を取消 空襲日より欠勤の沖繩新聞記者

全鮮を戦力化 朝鮮新聞会懇談会席上の決議

編輯する南方内外宣伝戦 戦力増強に全力 現地宣伝に新聞の役割は多大 特攻基地へ書翰を

戦時下の読者難 新聞で補へ 鳥取県特高課長の話

出版文化維持に地方紙の余力を 北海道新聞 出版界の態度を知りたい

機関新聞 雑誌の行方 強力な援助を期待 決戦遂行上不可欠の使命を担当(怒り方が足らぬ) ポツダム三國声明の取扱ひに注目すべき各方面の叫び(鳴咽の中に挿す 戦争終結の大詔) その日の在京各社 新聞公社

戦時小型紙消滅と群小新聞の登場 新聞界今後の動向 出向社員 引揚げ新聞及び新聞人の新発足(2) 言論人自ら新聞を経営せよ 評論家・津久井龍雄氏談

外地並に大陸紙の現況と将来 各紙とも一応解散 一部居留法人の機関紙として或は発行を継続か

外地並に大陸紙の現況と将来 台湾新報 鈴木支局長談

外地並に大陸紙の現況と将来 満洲日報 伊藤支社長談

外地並に大陸紙の現況と将来 大陸新報(上海)

中国新聞界の近況(下) 鹿刊が継続か 邦字新聞 入江啓四郎(同盟海外局企画部長)

樺太の新聞 8月26日以降発行されず

言論出版臨時取締令と新聞事業は死法 今後は新聞紙出版法で処理

戦災から復興へ(罹災各社から本社への消息) 不屈の鹿兒島魂 1日も休刊せず 使命完遂 鹿兒島日報の健闘

若き地方勤務者のために(1) 地方版の必要性 山代宗徳(毎日(東京)地方部副部長)

日本に唯一の華字紙 在阪神華人指導紙として生る

漁村文化と新聞(上) 漁師は平易な文章を欲す 橋爪健(漁民作家)

バギオ山中に穴居 終戦まで通信任務を果す 読売新聞社ダバオ支局長・佐野康氏帰還

飛ぶやうに売れる 巷に氾濫する雑誌と新聞 やめられない売子商売 何でも売れる街頭と駅売店

マ司令部新聞班主催の晩さん会に招かれての所感 日本新聞最大の欠陥は 指導性のなきこと、ダイク代将が指摘 デモクラシー日本の茶の湯

新聞は戦争で儲けたか(上) 先づ部数で 山根真治郎

華北新聞人消息 徳光東亜新報社長らは無事 相原勲

各社の在外社員は今どうしているか 帰還社員極めて僅少

好ましくない一果一紙 在京地方紙責任者との懇談会で 馬司令部新聞課長 言明

マ司令部新聞課の重大示唆 新聞材料の提供 民間情報部の仕事 検閲との限界を明にす

出版と誹謗法(上) インボデン少佐(連合軍新聞課)

帝都の印刷能力減に 地方紙出版へ進出 ちかごろの出版活動状況

業界の民意反映へ 転換期の「業界紙」に聴く

用紙委員 内閣移管の是非 業界各関係者に聴く 邪推に基づく反対 内閣審議室当局との一問一答